

漱石における生と死と

加藤 富一

一
漱石は明治四十三年（一九一〇）八月六日、転地先の修善寺温泉で大吐血をした。翌年、そのころの心境を『思ひ出す事など』一に書いている。その一節に次のような文章がある。

考へると余が無事に東京まで帰れたのは天幸である。斯うなるのが当り前の様に思ふのは、未だに生きてゐるからの悪度胸わるじまように過ぎない。¹⁾

漱石は、生きのびたことを「天幸」といつている。天が恵んでくれたさいわい、というのである。修善寺では「三十分の長い間死んでゐた」²⁾。死んだ自分が、今は生きてゐるのである。この「生死二面の対照」³⁾に漱石は感動する。大患を経験するまでは、生というものをありがたいと考えることはなかった。しかし、いったん死の淵をのぞいたあとは、まだ生きてゐることを「天幸」と考えるようになったのである。「未だに生きてゐる」から「悪度胸」がすわる。生きてゐることにとつぱり漬かっていると度胸ができる。しかし、これは死を知らないからのことであつて、それを知れば落ちついてはおれない。どつ

りとすわつてはおれない。だから、すわつてゐるのを、漱石は「悪度胸」と批判する。

二
しかし、漱石は必ずしも居すわつてばかりはいなかつた。人生の無常に思いをはせて次のように述べてゐる。

神楽坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大変淋しい感じがする。暮、戦死、老衰、無常迅速なご杯と云ふ奴が頭の中をぐるぐる駆け廻る。よく人が首を縊ると云ふが斯んな時に不図誘ふとはれて死ぬ気になるのぢやないかと思ひ出す。

（『吾輩は猫である』⁴⁾）

この叙述はイギリス留学から二年あとの明治三十八年（一九〇五）のものである。迷亭先生の口を借りて、漱石がその生と死について述べるくだりである。折から日露戦争が戦われており、多くの兵士が「戦死」する。「汽車」の汽笛も淋しく聞こえる。「無常迅速」が身にしみる。漱石は、「死」というものを忘れていたわけではない。人は「不図誘はれて死ぬ気になる」。自分から進んで死ぬこともあるのであ

る。生きてることと死ぬことと、その避けられぬものをどう考えていったらよいのか。漱石は自然科学の理論をとりあげる。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。学者の例証する所によると、一疋の大口魚が毎年生む子の数は百万疋とか聞く。牡蠣になるとそれが二百万の倍数に上るといふ。其うちで生長するのは僅か数匹に過ぎないのだから、自然は経済的に非常な濫費者であり、徳義上には恐るべく残酷な父母である。

「自然」は、「個々の滅亡を意」としないから、人間の「戦死」や「無常」を悲しまない。「自然」は「種類保存」という大目的を何よりも優先させる。そのため「非常な濫費者」となる。「個々」は「滅亡」しても、「種類」が「保存」されれば満足なのである。

漱石は、「種類保存」を認めざるを得ない。それなくして個体の存続はありえないからである。とすれば、個の滅亡はやむをえないこととなる。漱石は、こう考えることにより、「無常迅速」を認めようとする。

三

この自然科学的な考えは、漱石が『思ひ出す事など』で書いたもので、修善寺の大患以後の考えなのであるが、この萌芽が、実は早くから見られていた。それは『虞美人草』の次の文である。

「人間万事夢の如しか。やれやれ」

「只死と云う事だけが真だよ」

「いやだぜ」

(一)

「夢の如し」といつているのは、外交官志望の宗近君である。それに対して、哲学者の甲野君は、「死」だけが真だという。「夢」は「無常」である。変化してやまぬもので、安定性がない。ところが「死」は動かないものである。人はここに至って磐石となる。この「死」のみに真実がある、と甲野君はいう。動揺してやまぬ生きた人間。それに対して、不動の「死」。その「死」は「自然」の法則である。

漱石は、甲野君をとおして自己の死生観を述べる。『虞美人草』は明治四十年（一九〇七）に書いたものである。大患の三年前である。これからわかることは、漱石が大患を経験したために「自然」の法則を考えるようになったのではなく、以前から「死」についてこの法則を考えていたことである。

甲野君と宗近君との会話は、次のように続く。

「死に突き当らなくっちゃ、人間の浮気は中々已まないものだ」

「已まなくって好いから、突き当るのは真つ平御免だ」

「御免だって今に来る。来た時にああそうかと思ひ当るんだね」

人間の一生は「浮気」の連続だと甲野君はいう。「死」について真剣に考えることなく、生きてるのが「当り前の様に」思っている。これを「浮気」というのである。「浮気」は「死に突き当ら」ないとおらぬという。これに対して宗近君は「浮気」のまままでよいという。「死に突き当」るのはいやだからである。甲野君の考えは漱石のそれであり、宗近君のは世の多くの人の考えであろう。

四

小林秀雄も、この漱石と同じように考えている。『無常といふ事』

の中で次のようにいう。

「生きてゐる人間などといふものは、どうも仕方のない代物しろものだな。何を考へてゐるのやら、何を言ひ出すのやら、仕出来しでかすのやら、自分の事にせよ他人事にせよ、解つた例しがあつたのか。鑑賞にも観察にも堪へない。其処に行く¹⁷と死んでしまつた人間といふものは大したものだ。何故、ああはつきりとしつかりとして来るんだらう。まさに人間の形をしてゐるよ。してみると、生きてゐる人間とは、人間になりつつある一種の動物かな¹⁷」

右のように考える小林秀雄は、「死んでしまつた人間」を「常」なるものとする。「浮氣」は「無常」なるものということになる。それは「常」なるものを見失つてゐるものである。漱石はこれを「悪度胸」といふ。一見して「度胸」があるようである。「度胸」があれば「人間の形」をしてゐるはずである。しかし「悪度胸」は「浮氣」と同じものである。それは「無事に東京まで帰れた」のを「当り前」と思う。

しかし漱石は「帰れた」ことを「天幸」と考へた。これは「人間の形」をしてゐるといえる。『思ひ出す事など』の境地は、「生きてゐる人間」としての漱石が、「鑑賞」に堪える存在になつたことを示してゐる。「無常」から脱して「常」なるものになつてゐることを示す。

五

大正四年（一九一五）、漱石は『思ひ出す事など』と並ぶ代表的な随筆といわれる『硝子戸の中』を書く。前の随筆で「常」なるものとなつた漱石のその後を見よう。

不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私は、自分の何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは楽なものだとばかり信じてゐる。（略）

「死は生よりも尊たうとい」

斯ういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往来するやうになつた。

「人間の形」をしてゐる漱石も、「生きてゐる」かぎり人生は「不愉快に充ちた」ものなのである。とすれば、前項の「常」なる存在は、いつた何であつたのか。それは「天幸」を考へた漱石のことをさしたのである。「天幸」は死なずにすんだことに對する「天」への感謝のことばである。生きのびた漱石はしかし、以後の人生を生きなければならぬ。そしてその人生は「不愉快に充ちた」ものである。「人間の形」をなしたのは、短い時に過ぎず、「不愉快」な人生は長く続く。この人生を「とぼとぼ」歩くのに、どのような意味があるのか。これを考えると、「生」よりも「死」のほうが楽だと信じざるを得ないのである。

このように考へてくると、漱石は瞬刻には「常」なるものとなつたが、長い年月それになりえたのではなく、「死は生よりも尊たうとい」といふ厭世観を持つていたことを知る。大正三年（一九一四）十一月四日付の書簡の中で、漱石は、松山中学での教え子である林原耕三に於て次のように書いてゐる。

私は生の苦痛を厭うと同時に無理に生から死に移る甚しき苦痛を一番厭う、だから自殺はやり度ない。夫から私の死を扱ぶのは悲観ではない、厭世観なのである。

「生」には「苦痛」がある。「不愉快」がある。こういう人生を楽しいものとはいえない。しかし、だからといって「無理に生から死」に至ろうとすると、より大きな「苦痛」を経験しなければならぬ。「死は生よりも尊とい」が、「自殺」はいやだ。やはり「とぼとぼ」と人生を生きるしかないのである。

漱石の「自殺」はいやだという気持ちは、次の場合にも表れている。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送つて頂くのは光栄で御座います」と又云つた。私は「本当に光栄と思ひますか」と真面目に尋ねた。女は簡単に「思ひます」とはつきり答へた。私は「そんなら死なずに生きて居らつしやい」と云つた。

漱石はある女の苦しみを聞いてやる。女が「せつば詰まつた境遇」であることを知る。夜も十一時になつたので、女を送っていく。右の引用は、その時の女との会話である。漱石は「死なずに生きて居らつしやい」という。そのわけは、女がこの時だけは生き甲斐を感じているのを知つたからである。漱石自身、一瞬間だけでも「常」なるものとなつた経験がある。女も漱石に送られたこの時だけが、「光栄」と感じている。女は心の底から喜びを感じている。この喜びは漱石の感じた「天幸」と同質のものである。女は漱石と話していた時も次のようにいつている。

「私は今持つてゐるこの美しい心持が、時間といふものの為に段々薄れて行くのが怖くつて堪らないのです。此記憶が消えてしまつて、ただ漫然と魂の抜殻のやうに生きてゐる未来を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつて堪らないのです」

(四)

「この美しい心持」も「天幸」と同じものといえよう。あとは薄れてしまふ心持ちである。女は瞬間には「美しい心持」で生きているが、それは死なずに生きる長い時間の中で消え去つてしまふものである。「魂の抜殻」が生きていて何になるのか。女は漱石を「手の付けやうのない人の苦痛を傍観」せざるを得ない位置に立たせる。

しかし漱石は、この「むせつばいやうな苦しい話」を聞かされて、「人間らしい好い心持」を経験したと書いてある。たしかに漱石は、大患の時感じた「天幸」と同質の「美しい心持」を経験したのである。それは、ともに瞬間の経験である。そして人は、そのような「美しい」ものを永続的に持つことはできない。漱石も刻々「天幸」の念を薄れさせていた。けれども、女がそれと同質の鮮烈な「美しい」ものを味わせてくれた。これを「人間らしい好い心持」と表現して感動しているのである。

六

さてここで「時間」について考察したい。女は「この美しい心持が、時間といふもののために段々薄れて行くのが怖くつてたまらないのです」といつている。「美しい心持」を持ちつづけることはできない。それは「時間」のせいである。これについて、小林秀雄は『無常といふ事』の中で次のようにいつている。

上手に思ひ出す事は非常に難かしい。だが、それが、過去から未来に向つて餉の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想（僕にはそれは現代に於ける最大の妄想と思はれるが）から逃れる唯一の本来に有効なやり方の様に思へる。

小林秀雄は、「時間」を「蒼ざめた思想」といつている。「美しい」ものを「だんだん」薄れさせてゆくものだから、そういうのである。そしてそれは、「飴」のように延びている。「飴」の延びは間延びである。弛緩である。そこに「生きている証拠」はない。「時間」というものは、「現代における最大の妄想」と小林秀雄はいう。なるほど、そうにちがいない。人を「魂の抜殻」にしてしまうものなのだから。けれども、「抜殻」にもわずかな存在価値はあるう。かつては、「美しい心持」を包んでいたものであるから。しかし、それは昔のことに過ぎない。人にとって、過去の栄光はそれほど意味を持たない。「今持つてゐるこの美しい心持」こそ栄光なのである。これが漱石のいう「天幸」と同質の心持ちであった。

「上手に思ひ出す」は、「飴の様に延びた時間」の中にあつて、「動かし難い形」を心に浮かびあがらせ、しみわたらせることである。これはしかし、至難のわざである。「抜殻」や「飴」の状態が、人間をとらえて離さないからである。それらを「時間」という。人間の「生」は、この「蒼ざめた」時間というもので蔽われている。「浮気」が「生」を支配しつづける。

漱石も、この「時間」について次のように考える。

然し現在の私は今までのあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次に溯ほつて、百年、二百年、乃至千年万年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱することが出来ないの、私は依然として此生に執着してゐるのである。

「まのあたりに生きてゐる」自分は、父母からさかのぼる千年万年

の「習慣」の中にいる。この「習慣」が「飴」の実態なのである。千年万年の「時間」は、漱石をもつてしても「解脱」することのできないものである。小林秀雄の「時間」から逃れる「有効なやり方」がここで問題になる。

七

「上手に思ひ出す事」。これが「時間」から逃れる唯一のやり方のような、と小林秀雄はいう。「歴史というものは、見れば見るほど動かしがたい形」に見える。この「歴史の魂に推参」すれば、「時間」からの脱出はできるはずである

しかし、小林秀雄にとつても脱出はむずかしかつた。それを彼は次のように述べている。

あれほど自分を動かした美しさは何処に消えて了つたのか。消えたのではなく現に眼の前にあるのかも知れぬ。それを掴むに適したこちらの心身の或る状態だけが消え去つて、取り戻す術を自分には知らないのかも知れない。

小林秀雄が『一言芳談抄』を読んだ時、「いい文章だ」と心に残つた。「文の節々が、まるで古びた絵の細勁な描写を辿る様に心に滲みわたつた」。その文章は、鎌倉時代の「なま女房」の「生死無常のありさまを思ふにこの世のことはとてもかくても候」ということばを含む短文である。生死無常のこの世の中にあつて、世のことはどうあつてもよろしゅうございます、と女房はいうのである。この女房は「戦死、老衰、無常迅速」から脱け出ている。そのことを簡潔犀利に書いた『一言芳談抄』が小林秀雄の心をとらえたのである。

しかし、「飴の様」な「時間」が経過した。あの「美しさ」はよみがえって来ない。あの「美しさ」を「つかむに適した」心身は「時間」の経過とともに消え去った。小林秀雄は、かつては「充ち足り」ていた。「生きてゐる証拠」だけが充満していた。にもかかわらず、「時間」がその「美しさ」を消した。

小林秀雄のこの経験と似たものが、すでに漱石にもある。「尊」とい文芸上の作物さくぶつを読んだあとの気分」と書いている。これは前述の「むせつばい話」を聞いた夜、「かえつて人間らしい好い心持」を経験した、と書いたあとに述べていることばである。あの女の話は、鎌倉時代のなま女房のことばと同じように漱石を「無常迅速」から解脱せしめている。「尊」とい文芸上の作物」(『一言芳談抄』がこれに当たる)を読んだあとの気分、これが「時間」脱出の気分である。脱出できれば、生きることに意味が生じる。

しかし、「思ひ出す事」は「習慣」の中にいる人間にとって困難なことである。「尊」とい文芸上の作物」にであうことも稀なことである。漱石も小林秀雄も、生きているのは瞬刻である。

八

私に送ってもらうことを光栄だと思ふなら、「死なずに生きて居らつしやい」と漱石は女にいう。光栄だと思ふことは、「人間らしく好い心持」であり、「動かしがたい形」である。その「心持」「形」の時、人間は生きている。

しかしその時は一瞬に過ぎず、生きつづけることは困難である。やむをえず、「飴」のような生をつづける。そこで、「死は生よりも尊とい」と思いたくなる。「動かしがたい形」になれるからである。しかし、死なずに生きてそれになることが望ましい。ここに、「上手に思

ひ出す事」の困難さを越える必要が生ずる。そして、越えるには、「尊」とい文芸上の作物」が手を貸してくれることを知る。

文 献

- (1) 『現代日本文学大系』第十七巻。筑摩書房。昭和四十四年。
- (2) 前掲大系「思ひ出す事など」十三。
- (3) 同前十五。
- (4) 前掲大系第十七巻、二六頁。
- (5) 前掲「思ひ出す事など」七。
- (6) 「新潮文庫」十九頁。昭和四十三年。
- (7) 前掲大系第六十巻。
- (8) 前掲大系第十七巻『硝子戸の中』三六九頁。
- (9) 『現代日本文学アルバム 人と文学シリーズ 夏目漱石』二二六頁。学習研究社。昭和五十四年。
- (10) 前掲『硝子戸の中』七。三六九頁。
- (11) 同前。
- (12) 同前。
- (13) 同前。
- (14) 前掲大系第六十巻『無常といふ事』
- (15) 同前。
- (16) 同前。
- (17) 前掲『硝子戸の中』八。三六九頁。
- (18) 前掲『無常といふ事』
- (19) 同前。
- (20) 同前。
- (21) 同前。『一言芳談』ともいう。上・下二巻。平仮名書き。法然上人をはじめとする中世念仏者の法語を集めたもの。編者不詳。
- (22) 同前。